

野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)



バンクーバーの代表的な住宅街風景

その7：カナダの生活－新しい職

カナダ移住後に、数年の時間があっという間に過ぎた。移住とともに、現地の小学校で学ぶ娘たちは、親も驚くほど早く順応し、2か月後のクリスマスには長女が学年を代表して祝辞を述べることになり、学校から招待を受けた。祝辞は、カナダに移住して2か月余の子供のことであり、たどたどしかったが、それでもしっかりしたものであった。1年後には、次女も含め二人ともクラス内で上位の成績を収め、新しい生活に完全に溶け込んだ。我々もトヨタコロナの新車を買ひ、機会あるごとに週末旅行を楽しんだ。友人から聞いたり、地域紹介の旅行本を読んであちこちを冒険旅行するうちに、翌年にはテントと寝袋まで買って、キャンプにも年に2回ほどでかけ、自然の温泉も見つけた。カナダの温泉については、いずれ紹介したい。当時の主たる目的地は、150km 内陸の海岸山脈

(Pacific Mountain Region) の中にあるマニング州立公園 (Manning Provincial Park) という、よく知られた自然公園であった。車を買った翌年の春に同公園に出かけた折、山地に入る最初の急坂でいきなり車が咳をするような音とともに走らなくなった。やっとの思いで車寄せを探すと、何と幸いなことに、その駐車場で休んでいたのは、家族旅行で来ていた我が家の家庭医であった。同人は、事情を察し、バンクーバーのトヨタのディーラーに電話をし、最寄りの町まで車を運んで貰った。翌日、日本人の修理工がバンクーバーのディーラーから派遣されてきて、車の修理をした後、滞在中の公園内のホテルまで届けてくれた。それ以来この日本人

の車両修理工とは長い付き合いとなった。また、医師とは、彼が他界するまで家庭医として世話になり、のちに僕が発症する肺気腫では殊更な世話を受けた (後記)。

そんな私生活は、振り返ってみても、将来に大きな希望を持ち、仕事も私生活も全身を以て熱中できた僕の人生の中でも、最も幸せで悩みのない時期だったかもしれない。そんな幸せの中で、アパート生活が1年経つ頃、上司から「2人も子供がいるのだから自分の家を建てたらどうか」と勧められた。これは全くの予期外で、「カナダに来て1年、冗談でしょう」と言う僕に、「カナダで生活するのなら自分の家を持つのは当たり前」と、工場長からも同様の勧めがあった。そこで、会計士から、簡単な規制と、住宅売買の現状を学んだ。それでも僕は半信半疑で、「渡来間もないので資金も無く無理だ」と伝えると、会計士は「銀行にお金は沢山ある、借りればいいのさ」と、早速どこかに電話した。会計士は直ぐに僕を連れて、会社から歩いて5分のカナダの代表的な銀行の支店に出かけ、知人らしい銀行員と個室で、当時の家の担保となる2,000ドルほどの融資の承認を受けた。その証書を建築家なり、不動産店に見せれば、あとは担保手続きだけで良い、とのことであった。たった30分の交渉で家を買えるとは信じられなかったが、これを聞いた社内の友は皆喜んでくれたので、納得して決心した。実は渡航を考える直前まで、池袋の郊外に家を建てようと、自分で設計までしていたので、住宅に関しては全くの素人ではなかった。社内に不動産

事情に詳しい人がいたので、建築家を紹介して貰った。たどたどしい英語で、こちらの希望を伝えると、住宅構造は当時の日本のそれとはまったく異なることに気づいた。もちろん当時の我が家の財政では大きな家を買う資力も無ければ、勇気もない。結局、身の丈に合った平均的な小住宅の図面を数種類借り、家に帰って勉強して選んだのが、人生初めての、約 100 平方メートルの 2 階建であった。上階はリビング、台所に寝室 2 室、1 階はリビングに 1 寝室と小型収納室、更に車 1 台分の屋根下駐車スペースを予定した。そこで、車で 15 分ほどの新住宅地に、広さ約 700 m²の土地を探し、2 年目の冬に、夢に見たわが家に引越しが決まった。引越しの夜、リビングに造られた暖炉に火を灯し、皆でその前で駆け回って大騒ぎをした。その後、3 回家を替える度に、暖炉は我が家の不可欠な設備となった。

こうして 2 年目が過ぎ、仕事も月に 1、2 回、得意先に出張し、合成樹脂製品の品質評価を受けたり、新製品の要望を集めたりと、至極順調であった。カナダの社会が、市民として受け入れてくれた心の豊かさは、間もなく 90 歳を迎える自分にとって、心に深く植え付けられた何よりの感謝である。その初めての我が家も 5 年ほどで売却した。今は外壁が塗り替えられたが、昔のままの形で残り、時々前を走って懐かしむことのできる、心に沁みるカナダでの軌跡である。

話を仕事に戻すと、日本で得た経験と知識は、当初、カナダの合成樹脂化学のレベルと殆ど同じと感じていた。実はそう簡単に比較できるものではなく、得意先との親密さと技術交換の容易さは、社内の同僚の様で、日本では考えられない技術開発の利点だった。一方、社内の研究設備や技術知識は、日本よりかなり遅れていた。カナダでは、基礎研究は殆ど大企業や大学の研究所の仕事で、社員の退社の多い中型の企業では、基礎研究が軽視されていた。当時、先進の合成樹脂製造会社として、基礎研究の重要性に気づかないことに対する不安と不満は、

危うく僕の人生を変える事態となるところであった。

化学分析は、合成樹脂の試作研究の段階で必要不可欠である。しかし、社内にはこれに必要な分析機器がない。早速上司に相談すると、当然のこととして、それは大学研究所で分担してくれる仕事で、契約した大学のかんりの高度な機器を使用でき、出張実験も希望すればできることが解った。当時の製品は未だ、群を抜いて特殊な反応によるわけではなく、大学のような機関で、設備を借りて解明した技術が簡単に公開される危険も無かった。それでも外部の機器を頼って開発研究をすることにはかなりの違和感があり、1960 年代のテクノロジーは、まだ基礎の段階を脱していないと感じ始めた。

当時の僕は、狭い知識とカナダ社会への無知から頭だけが先行し、やたらと独自の研究設備を整えることを課長に図った。しかし研究技術者でない課長には、全く意思が伝えられず、恐らく研究機構について理解いただけなかったと思う。このような苦悩の中で、僕は能力の限度を超えた先走りや、無知な考え方によって、やがて会社から受けた恩義を裏切って転職を考えてしまった。外国人を受け入れて、一家の生活を即座に安定させてくれた会社を去って、僕は、昔から興味を持っていた紙加工の分野に進路を定めた。新聞の求人欄を探し、近郊の紙加工会社が技術者を募集していることを知り、思慮もせずに応募してしまった。

それから数日後のある日、工場長から呼び出しがあり、「事情があつて技術課長 (Technical Manager) が営業部長に転任するので、お前に彼の後を引き受けて貰いたい。」と話があつた。工場長は、以前から技術部門が業務の中心になるべきだと考えていたらしく、「この機会に組織を変えて技術部門を独立させた組織としたい。」と聞かされた。まさに、転職を考えていた矢先のことである。後になって、その経緯が分かって動転した。実は転職しようとした会社は、当社の顧客で、僕のことを当社に問い合わせたことから転職の意向が会社に知られたの

だ。間もなくその会社から、丁寧な応募中止の手紙が来た。それを知っていたらしい工場長は、そのことには遂に触れることなく、公私に涉って身に余る配慮と応援を施していただいたが、定年後直ぐに癌でこの世を去られた。今も感謝の気持ちと、何も恩返しができなかったこ

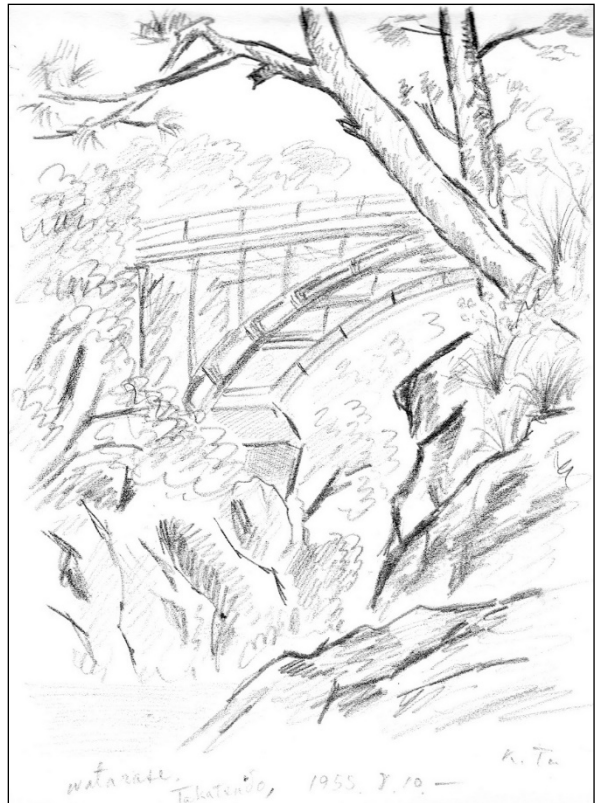
とが、僕の胸を締めつける。僕の本当のカナダ人としての会社生活は、新しい Technical Director としての責任のあるポジションに就いたことから始まった。ちょうどカナダに移住してから5年目のことであった。（この項終わり）



マニングパークでよく見る「地栗鼠」



家族一同、車(トヨタコロナ)で近くの自然地に出掛けました



高津戸橋のスケッチ 日本で描いたものです